

朝鮮より涙の生還

大分県 梶原 徳次郎

私たち家族は、北鮮の城津府本町にある総督府鉄道部城津事務所勤務している関係上本町官舎街に居住していた。昭和二十年八月十五日突如としてソ連軍が清津方面より南下。次々と武装解除を強行。私たちの官舎街にも襲撃の報が伝わる。急遽防護団本部を設置。不慮の災厄防止に対応。しかし朝鮮人が集団的に暴動を起こし、喚声をあげ、日本人家庭各戸手当り次第に襲撃、略奪をほしきままにし目ぼしい衣類や書籍類等を恰も蟻が物を運ぶように持ち去るのを只呆然と傍観するのみであった。終戦の数日前、京城駅行き最後の直通列車を利用し家内や子供の引揚げ計画を準備していたところ、時の事務所長勝又定一氏は、戦争はやがて終結するので、冬期を前に官舎居住者は各自越冬準備をすること、かつまた職場貯金の引き下しは、厳禁

等々、常軌を逸した示達を發した。これらにつき職員や家族は彼の措置を非常にうらんだものである。

われわれ城津地区は、冬の到来前に一日も早く米国統治下の京城まで南下したいと思ひ、一同協議のうえ、二百人の男女子どもを三班に分け、夜半零時半から三十分間隔でそれぞれ分派行動をとることになった。道順も申し合わせをし途中悪質な村落はつとめて避け、場合によれば山野の通行も已むを得ないとした。私たちの班は、他の二班と異なり比較的に女、子どもが多く引率上気苦勞が多かった。女子は小学校二年生以上は断髪、顔には墨を塗るなど、恰も非人間よりの容姿なので、見るからに可哀想で、改めて敗戦の惨めさを味わった次第であった。咸鏡南道咸興府近郷にさしかかったとき、ソ連軍ならびに朝鮮人組織の保安隊（俗称警備隊）に発見され南下阻止にあい、やむなく府内の鉄道所有の宿舎に収容させられた。ついにこの収容所で一冬過ごすことになる。私は五人家族（妻、子ども三人）を抱え、ソ連兵病舎に使役として働き、毎夕使役が終ると残飯の支給を受け、余分は弁当箱一ぱい

二円で希望者に分配するなど当座の飢えだけはしのぐことで極寒の年を越すことができた。しかし毎夜のようにソ連兵がわれわれの宿舎に来襲、暴行略奪を受けた。こんな不安な避難生活の中で、体力も徐々に衰え風邪、熱病等におかされ、その上狭い部屋での集団生活のため、ノミ・シラミの媒介による病気が蔓延し死亡者も次々と生じた。埋葬の手続きや埋葬地への運搬など悲しみと不安の中で越年、正月も過ぎ二月中旬ごろ、突然日本人は間もなく日本へ帰ることになりそうだとの話が流布されたが、あとでそれはデマだと知りがつかりしたものであった。

三月に入りお互い表面上は平静を装いながら、三々・五々咸興の地をあとにしたのである。途中、福溪駅（交通の要所）附近に来たところ再びソ連最前線部隊と朝鮮人保安隊とに発見され、駅前に強制連行され、次々に南下してくる日本人も含め午後八時ころまで地べたに座らせられた、殊に私たちは朝十時ころから一食も口にしておらず、加えて当日は晴天のため、せめて子どもたちに飲料水ぐらい欲しいと懇願するも、そ

の一滴の水ももらえず、この世の地獄の一端をおもい知らされた。大人はまだしも子どもは実に可哀想で涙が出た。妻も乳呑児をかかえての強行軍。ひたすら日本の土地を踏むまでは強い信念で、みな黙々と集合した。およそ二千人に達したと聞く。そして二十両連結の京城行きという貨物列車がホームに待機したのを見た。軍側では早く乗車するようわれわれを促した。しかし機関車が北方行きに連結しているのを知り、これは変だぞと直感。同乗者もそれぞれ気づいたと見え、間髪を入れず反対側線路に飛び降り、命がけて幾十両かの停留車の下をくぐり抜け、構内を脱出、間もなく道路に出たので、一同黙々と早足で南へと一途に急いだ。彼方では闇夜の中銃声がしきりに聞こえる。約三十分ほど経過したあとは銃声も聞こえなくなり周囲がしずかになった。一安堵と疲れがどつと出て線路下の松の根方に仮眠することになった。熟睡の中から北行列車音で一同目が覚めた。

われわれの行動力は、ひたすら国境線という山を越えることが目的であった。いよいよ国境線間近の前日

長患いの病人一人のことで相談しあつた。米軍は病人は一切通過禁止で無理に通ると全員も犠牲になり居住地に戻されるという。その家族は涙ながらに納得してくれた。そしてその病人の自らの命を断ち穴に納めたとき、その家族はもとより周囲ももらい泣きしたことが、いまでも目に浮かぶ。

翌日、全員検問所を通り、伝染病の予防注射も無事終り、証明書を受給。無事京城府外の駅に下車、市内の日本人会のあたたかい歓待を受けた。私たちは運よくその日のうちに釜山埠頭行きの列車に乗り込むことができ、更に米軍の好意で一日早く釜山港を出帆することができたのである。

私の戦争体験記

大分県 阿部 強

昭和二十年八月十日、ソ連の艦砲射撃が始まる。全員避難せよ、との命令で工場（朝鮮鉄道清津工場）勤

務の私は書類の片づけをし、全員一度家に帰り、身のまわりのものをまとめた。

家の者は、早朝に避難したのであろう。家の中はそのまま、で、誰もいない。妻と娘二人は、官舎の人達と一緒に行動をとつたであろうと思つた。とりあえず、食糧をと、非常食の中から缶詰の大きなのとそのほか少々の物を持って駅へと急いだ。ところがどうでしょう。駅には人一人いない。約束の時間にまだ五分ある。しかし、汽車は出た後なのだ。

引率する私をほったらかして汽車は出ていたのだ。どうしたものかと突つ立っていたら、北のほうからポーン、ポーンと汽笛の音が聞こえてくる。まだ遠くには行っていない様子だが、後を追つて走るのはとてもではない。

汽車は山ぞいをまわっているから、直線で羅南駅に行こうと考え、海岸線に沿つて走つた。砂地で、三菱製錬所がある所で、B 29 が落下傘をつけた爆弾を何個も落とした所だ。

砂地をとにかく必死で一人で走りつづけた。どのく